

派遣報告書 (韓国外国語大学校／2012.8.3～10.31)

博士後期課程 牧野 波

派遣者の研究は、韓国における歴史記念（コメモレイション）のありようとナショナルリズムが個々の施設の中でどのような関係を結んでいるのかを探ることが主題となっています。今回の派遣期間中は、派遣者の調査対象の一つである国立ソウル顕忠院の現地踏査活動を中心に、周辺資料や参考文献の渉猟を行うことができました。また、さまざまなシンポジウムを聞く機会、現地での研究会に参加する機会にも恵まれました。以下、個別にわけて活動の内容と成果を報告します。

1) 国立ソウル顕忠院の現地踏査・資料収集

約三ヶ月の滞在期間中に、目下の研究対象であった国立ソウル顕忠院（韓国で最初にできた国立墓地）を数度訪問しました。どの墓域にどのような兵士が埋葬されているのかなどを墓地管理所の職員の方にうかがったり、2009年に新たに造成された金大中元大統領の墓域の様子などを詳しく知ることができました。（うち一回はベトナム研究者とともに踏査を行いました。朝鮮戦争など国内の死者については死亡場所が詳しく墓碑に明記されているのに対し、ベトナム戦争への派兵で亡くなった死者については死亡場所が「越南」とだけされているなど、どの戦争で亡くなったかで死者の扱いが異なるということ、また大きくは韓国におけるベトナム戦争の位置づけについて大きな示唆を受けました）

さらに、滞在中の9月から、韓国では年末の大統領選にむけての候補の擁立など選挙戦がヒートアップしていきましたが、その過程で各候補者が国立ソウル顕忠院に参拝する様子や、それをめぐる国民の側の反応などを現地の雰囲気の中で知ることができました。

また、滞在中には、お世話になった韓国外国語大学校の図書館や国立中央図書館で、国立ソウル顕忠院に関する資料を収集することができました。国立ソウル顕忠院は、墓地自体と同名の部署（国立ソウル顕忠院、1996年までは国立墓地管理所）によって運営されていますが、同部署がほぼ約5年おきに発行している『民族の魂』という墓地運営の状況を広報する書籍をはじめ、大幅に墓地が拡張された朴正熙政権期の新聞資料など、さまざまな資料にあたることができました。現地調査と資料収集の成果は、国立シンガポール大学でのシンポジウムで発表したのち、論文として改稿し博士論文の一部として組み込む予定です。

2) そのほかの資料収集・現地踏査

今回の滞在中は、後述する研究会に参加している先生や学生さんがたの協力を得て、延世大学図書館などでも資料の収集を行うことができました。派遣者が国立ソウル顕忠院以

外で研究対象にしている戦争記念館と独立記念館の基本設計報告書、建築設計報告書など新たな資料を見つけることができました。

3) シンポジウムや研究会への参席

ソウルを中心に行われた各種シンポジウムなどを周囲の研究者から教えてもらい、聴きに行くことができました。特に、ハヌル出版社の主催で中国から人文学者の銭理群を招いた記念シンポジウムでは、改革・開放以降の中国共産党政権に対して民主化を達成した韓国の知識人たちの側からはどのようなまなざしが向けられているのかをうかがい知ることができ、日本から韓国と中国を見るのとは異なる観点に触れることができました。

また、東京外大に外国人研究者として滞在なさっていた李慧真先生の紹介で、延世大学の金哲先生の主催で毎週開かれている研究会に参加させていただきました。19世紀末から20世紀初頭に日本で出版された朝鮮の事情を記した雑誌を逐語訳していく会で、近代初頭の古い日本語を、古めかしい朝鮮語に直す過程を学ぶことができ、語学能力の涵養に非常に役立ちました。

また、主催の金哲先生は「韓日連帯 21」という日韓の知識人をつなぐ集まりを中心に出版した『東アジア歴史認識のメタヒストリー』という著書がありますが（共著）、国家の歴史・過去の表象を扱う派遣者の研究について、韓国の民族主義／ナショナリズムについて批判的に考える立場から、内容的に多くのご教示をいただきました。

4) 曹喜昞『動員された近代化』翻訳

派遣者は前回派遣時（2011年10月～2012年3月）に、聖公会大学の曹喜昞先生の著書『動員された近代化』（フマニタス社、ソウル、2010年）翻訳を担当するお話をいただきました。継続して翻訳作業を続けてきましたが、2012年末の韓国大統領選挙にあわせて出版するという運びになり、ソウルで曹喜昞先生から内容について直接お話をうかがったり、文献にあたることができました。『動員された近代化』は朴正熙政権の開発独裁の構造的な性格とその変化について、グラムシのヘゲモニー理論を用いて分析した書籍です。派遣者の研究でも朴正熙政権期は韓国での歴史記念事業が体系的に成立した時期として重要であり、研究の時代背景について学ぶ良い機会になりました。日本語版は、2013年1月末に彩流社から出版されます。

総体的に、国立ソウル顕忠院の現地調査・資料収集を軸として、具体的な研究を進めるうえでも、研究の枠組みを構築していくうえでも、得るところの多い滞在となりました。この場を借りて、あらためて派遣の支援を受けられたことに、また研究者から事務の方へいたるまで派遣活動に関係してくださった方々に感謝申し上げます。